老舗から展望する神田のこれから
―トランスアートトーキョー2014にふれて―

東京大学先端科学技術研究センター
特任助教　博士（工学）
中島　伸

○神田、老舗との出会い

日本、それも東京は神田に創業百年を越える老舗が多い。都市計画・都市デザインといった分野を専門にしている筆者にとって、老舗が多いことが都市に与える影響は幾ばくか、人が業を起こし、働き、住み続けられる、またはそうしたくなる秘訣やまちに対する思いが老舗にはあるのかもしれない。そんなことが気になり、神田に通うようになった。そこでは老舗だけに限らず、神田に生きる人たちとの出会いが研究室の学生と共に刺激を受け、勉強になる日々を過ごさせていただいている。東京大学も神田が生誕地であり、縁も深い。

○神田リビングパーク～トランスアートトーキョー2014に期待する（した）こと

筆者は今年で3回目を迎えるトランスアートトーキョー（以下、TAT）という神田を舞台にしたアートイベントに都市デザインの立場からTATアートデザインリーグの一員として企画、運営に今年から参加している。今年は、旧東京電機大学の跡地をメイン会場にして、神田の様々な場所で、9月20日から11月3日までの約2カ月という期間で行われる。本原稿を書いている時期は、TATが華々しくオープンした9月下旬執筆。本誌が発行されるのは、会期が終わった11月以降ということで、今まさに現在進行形のものをある時点でのドキュメントとして、「果たしてTATとは何であったのか」、そうした眼差しで以下お付き合いいただけると幸いである。都市とは常に動的で、こうした今を生きる思いと振り返った記憶の蓄積で成り立っている。

TATの今年のテーマは、「神田リビングパーク」である。このテーマのメッセージは統括ディレクターである中村政人さんのメッセージに譲るとして、私なりの思いについて少し書きたい。

江戸の町人地の生活文化を今に感じさせるまち、神田。近世から近代、関東大震災や東京大空襲、高度経済成長、バブル崩壊、様々な変化にさらされ、今もなお東京の都心の代表的な界隈のひとつとして生き続けているまち、神田。変化を受け止め、人々がこのまちで働き、住んでいるということは変わらない。この変わらずに変わり続けているまちのこれから、とりわけ神田で住むということの重要性について、ここで考えたい。神田の次のまちのあり方を神田に関わる人たちと構想したい、そのためのかりそめのアートの公園。TATを通じて、アートを介して神田に働く・住むということの可能性や魅力を再確認、再検討することが神田の次のステージを考えることになることを「神田リビングパーク」に期待した。

そして、このアートデザインリーグメンバーで企画したものに「アーバンキャンプトーキョーホテル」がある。（残念ながらこれも読者諸氏が本誌を手に取る頃にはもう終わってしまっているのだが。）これはTAT会期最終週の11月1～3日土日祝日の3日間、旧東京電機大跡地でキャンプを行うというものである。ここでは、テントを持ち込み宿泊することはもちろん、神保町のキャンプ用品店、メーカーの協力をいただいたレンタルテントに宿泊することもでき、野営ながら都心神田に住むということの疑似体験をすることが可能となる。こうしたキャンプを謳った都心のイベントで実際に泊まることができ、キャンプファイヤーも行えることなど滅多にないことである。私たちがここで考えたことは、建物の跡地、都心の何もない土地をホテルに見立てるということから、平日のビジネス街のイメージでは見えてこなかった週末の神田を体験してもらうことだ。このホテルが用意する様々な活動やプログラムは神田での暮らしを想起させる。スポーツ、自然、老舗ツアー、防災、コミュニティ、まちづくりなどのワークショップなどのプログラム。これらはアーティストやクリエイター、大学の研究室などが用意したものだけではなく、神田の地域の方々、企業などにも参加いただき、参加者（宿泊客だけでなく、日帰り客や地元の方たちも）には、今まで見えてこなかった神田の暮らしを感じてもらえるはずだ。

○老舗まちかどツアーにむけて

この「アーバンキャンプトーキョーホテル」の中で、私の所属する東大都市デザイン研究室は神田を「老舗」というキーワードから読み解くまち歩きツアーをNPO法人神田学会と共同企画した。近年、都心トークなどで老舗のトークイベントを積極的に開催している神田学会のご協力を得て、東大都市デザイン研究室は神田の方のインタビュー調査など、地域の方たちから神田の奥深さに触れる機会を多くいただいている。

キャンプ参加者など神田の来街者にも神田を知ってもらう上で、神田の老舗に出会い言葉を交わすことが最も手っ取り早く神田の魅力に触れることが出来るだろう。そこで、このツアーでは①神田のまちの成り立ち、老舗の活躍を支える背景としての都市の歴史に触れ、②神田の人との出会いを大切にしながら、③今回のまち歩きの企画が、神田の老舗のこれまでの横のつながりに新しい関係性や発見のあるものとすることを目指した。

老舗の方たちにお話を伺うと、住み続けている地元としての責任感であったり、隣近所、横のつながり、連帯感であったりが、ここで暮らし続けるということにつながっていることがわかる。また、神田ならではの暮らしの楽しみ方や祭りに対するこだわりなどのまちに関心のあるものならば、魅力的なお話の数々が聞ける。新しいコトやモノが大好きな老舗の方たちの協力を得て、今回はツアーの最後に食事として「江戸神田百年弁当」なる老舗の味が一堂に会したお弁当を企画している。これも地元の方達の面白そうじゃないかという発案で現在調整中だ。老舗の方たちは、常に自分たちの神田を誰かに楽しんでもらおうという気持ちで溢れている。

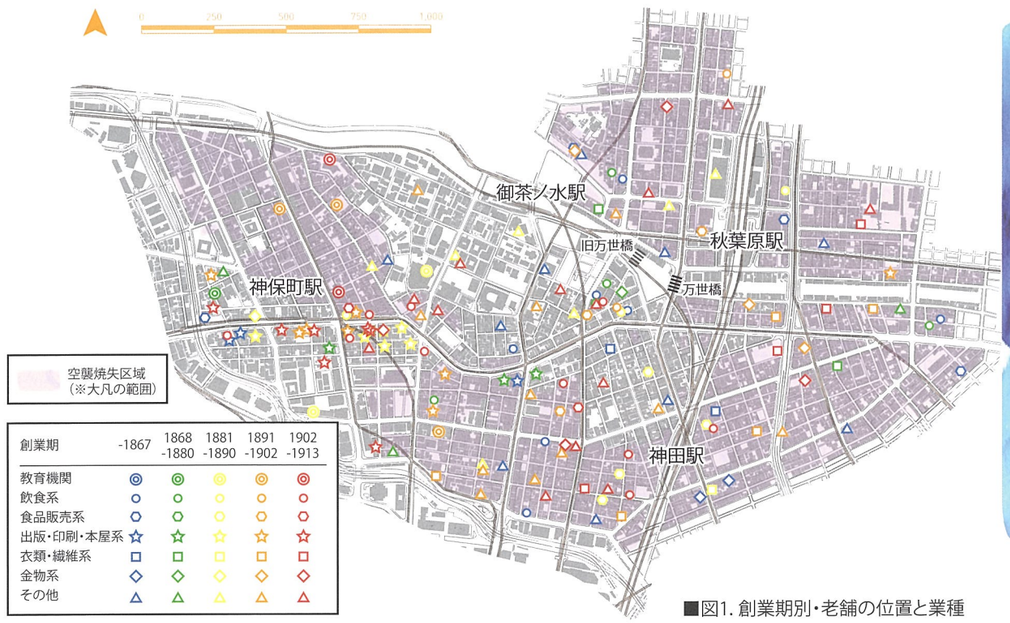
では、なぜ我々はこのような老舗まちかどツアーをまちづくりの観点から行おうとするのかと言うと、具体的なお話を聞く場所の体験にこそ価値があると考えている。「まちかどツアー」と謳っているように、店先や軒先、路地裏での神田の人々からのお話を聞く場になるのだが、これらは皆神田に根付いたコミュニティのつながりを感じさせる場であり、ここでの体験とその再生こそが神田での住む・働くをつなげる舞台となると考えられるからだ。これによって、参加者だけでなく、協力してもらう神田の人たちにも何か感じるものがあるといいなと考えている。TAT開催にあたり、学生たちとアートな縁台を作製したこともこうした思いとつながっている。

○神田調査報告～データから見る神田について

この後数ページにわたる東京大学都市デザイン研究室の調査報告は、前述の老舗まちかどツアーのルート検討のベースとなる資料の一部であり、神田の都市の特徴の一端を示したものである。今回の老舗まちかどツアーも、研究室での調査成果発表として、一つの経過報告のものであり、まだまだ至らない点もあると認識している。それらを学生たちとまちに入り、一つ一つ教えていただきながら、神田の魅力を深掘りしてゆきたい。

老舗に見る歴史の面影

神田に多く立地する老舗企業は、創業から災害や戦争を経て百年以上も営業を続けながら、神田のまちを見守ってきた。老舗が見てきた神田のまちと神田に残ってきた老舗、その共に歩んできた時代を振り返る。



■図1. 創業期別・老舗の位置と業種

本稿では主に老舗が店を構えている場所や業種に着目し、多くの老舗が創業した1868年から1913年まで、そして関東大震災から戦後・バブルにかけての危機の時代を、神田のまちの歴史の要点とともに振り返る。

旧万世橋建設（1868～1880）

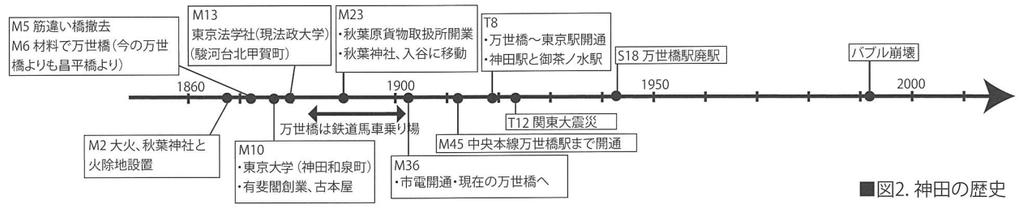
この頃創業した老舗は、旧万世橋近辺と錦町周辺に立地している。当時秋葉原は、1869年の大火で広大な火除地と秋葉神社が設置され、人の集まる広場になっていた。明治5年に筋違橋が撤去され、翌年に万世橋が、現在の位置よりも昌平橋寄りに建設され、筋違橋に変わって秋葉原と繋がるにぎわいの場となっていた。また、1877年東京大学が創立され、法学部・理学部・文学部の校舎は神田錦町3丁目に設けられた。

大学街の形成（1881～1890）

この頃創業した老舗は主に出版や印刷で、錦町、神保町周辺に立地している。明治中期のこの時期には、錦町、神保町周辺等に大学街が形成されていった。1880年に法政大学の前身である東京法学社が駿河台に開設された後、学生の急増によって神田錦町に移転した。その後も、1885年には専修学校（現専修大学）が今川小路に移転、1886年に明治法律学校（現明治大学）が神田駿河台に移転、1885年に英吉利法律学校（現中央大学）が神田錦町に創立と、次々に大学が立地した。

水運の発達（1891～1902）

この頃創業した老舗は広く立地しており、再び旧万世橋周辺や東神田にまで広がっており、金物や衣類の問屋が神田川近くに見られる。この時期には神田川が水運の要衝として活躍し、また1890年には秋葉原貨物取扱所が開業した。神田川は隅田川に次ぐ量を誇る輸送の要衝で特に万世橋近辺には荷揚げ場が集まっており、荷揚げの人で賑わっていたという。また鉄道馬車が交通機関として活躍している中、万世橋は鉄道馬車の乗り場になっており、乗降客で賑わっていた。



■図2. 神田の歴史

市電開通（1903～1913）

この頃創業した老舗は業種を問わず神保町靖国通り沿いと、須田町周辺に立地している。ちょうどこの時期にあたる1903年に市電が開業した。神田では神保町駅の乗降客数が非常に多く、多くの路線の乗り換え駅である須田町駅も乗降者数が神保町駅に次ぐ多さで、駅周辺には繁華街が形成されて賑わった。

関東大震災（1923）

関東大震災の被害は大きく、焼失面積は神田区全体の94％という非常に規模の大きなものであった。人口が減少したまま戻らず、また、1925年の山手線全通、中央線複々線化以降市電の隆盛に陰りが出たこと、神田多町の青物市場が秋葉原に移転したこと等、神田にとって変化が訪れていた。現在残る老舗も多くが関東大震災で焼け出されたが、再建や、神田内での移転をしながら営業を続けていった。

太平洋戦争と高度経済成長

太平洋戦争の際、神田区では神保町方面の西側と外神田方面の北側が空襲にあった。また戦後は神田駅あたりと須田町から神保町にかけて巨大な闇市が形成された。現在に残る老舗は、戦時中は異なる商売をしたり疎開したりしながら、戦後は当主や建物を失いながらも再建を果たした。戦後はバブルによって地価が高騰し、「底地買い」や「地上げ」が横行して多くの事業者が神田を去る中、土地の縮小や住居を移しながらも神田での営業を続けてきた。

以上で見てきたように、老舗はその創業期において、交通の中心や大学街形成といった隆盛の時代を見てきた。その中心地に立地した老舗も多い。しかしその後、神田のまちは災害を含む危機を迎える。その中でも、現在残っている老舗は様々な努力のうちに神田のまちに残り続けてきた。長く神田のまちを見守ってきた老舗は神田のまちをどのように捉えているのか、何を魅力に思ってきたのか、次ページではインタビューからその一端を見てみよう。

老舗が語る神田・まちのキーワード

老舗事業主の方々にインタビューをさせて頂く中で拾い集めた神田のまちのキーワードと、そこから焦点を当てたものをいくつか紹介する。ここから老舗と神田のまちやひととの関わり方、そして神田のまちやひとの魅力を感じてもらいたい。

（本稿は羽野（2014）『神田における老舗集積の立地要因と役割―旧連雀町・佐柄木町地域の老舗分析から』東京大学卒業論文を元に構成した）

町会ごとの結びつき

町内会ごとの結びつきは強い。神田祭では町内会ごとに張り合ったりもする。

人好きで好奇心旺盛

神田の人間は、人好きで好奇心旺盛で、排他的でなく、新しい人が入ると興味津々になるが、新しい人は、少し疎外感は感じるかもしれない。

映画館

神田には結構映画館があったが、この界隈にあった映画館もなくなってしまった。JR駅の方には神田キネマ、ワテラスの方にはシネマパレス…

神田への愛着

（商売をするなら）神田でないとだめ、という気持ちがある。

神田祭の賑やかさ

神田祭になると、やっぱり神田の雰囲気は変わる。神田祭は山王様よりも商売をやっているうちが多いから賑やか。

神田駅

子どもの頃は、神田駅は草が生えたようなところで、みんな都電を使っていた。神田駅から三越まで歩くなんて考えられなかった。神田駅の方は町境だった。

神田っ子の祭への情熱

神田祭のために娘さんやおかみさんを売ってしまったくらい祭りに入れ込んでいた。

江戸っ子気質

下町らしい、乱暴な口利きだが、人と人との距離が近いのが魅力。
江戸時代のまちづくりのときに、一番はじめにつくった職人町で、江戸っ子気質が発達した場所というのもある。
長屋が多くて、宵越しの金は持たない気質も育っていた。

まちとの関わり方

祭りでは離れてしまった人も戻ってくる。住民が少なくなっているというが、自分も神田に住所を置きつつも、家内は他区に住所がある。そういう人は多い。実際には住民票は減っているが、昼間人口は減っていない。

近所付き合い

隣近所とのつきあいのある生活だった。子どもの頃、近所の家でお風呂に入れてもらうこともあった。
今は生活の場での付き合いは少なくなってはいるが旅行の間に留守をお願いし、帰ってきたらお土産を渡すというような付き合いは残っている。

まちの若旦那

子どもで、中学くらいの時にでも、近所の薬屋さんなんかは若旦那、と呼んでくれていた。将来あのお店を継ぐんだよ、ということで。
今はそんな呼び方はしない。
自分はなるべく呼んであげるようにしているけど。

万世橋駅

万世橋駅があったときは、この辺（旧連雀町）は駅前通りで大変賑わっていた。総武線は本当は万世橋駅に持ってくる予定だった。

ノブレス・オブリージュ

地域に貢献する、という意識がある。

多趣味な旦那衆

神田は江戸文化の発祥地のようなところがあって、
神田の旦那衆はみんな何かをやっている。絵や歌など、いろいろなことをやっていた。

響きうち

神田は昔から響きうちといって、江戸城の太鼓の音が聞こえる範囲のこと、と言われる。

高級住宅地・お茶の水

僕らの頃の高級住宅地といえばお茶の水だった。西郷さんの家もあったし。立派なお宅が沢山あった。

近所付き合い

下町らしい近所との密な付き合いが見られるまちだった。「江戸時代の隣組の組織がしっかりしていて、その名残か、隣近所の付き合いは昔は密だった。お総菜が余ると隣にお裾分けをしにいったりということもあった。電話も貸し借りしていた。そのお礼に、一年の末にお菓子でも持って行った。戦争中を境に、（こうした関わりは）だんだんなくなっていった。」（談）

ノブレス・オブリージュ

地域を背負っているという責任感や愛着から神田に対して地域貢献をしていこうと考えている。「接客業だと、お客さんが来るということは車や人が入ってくるなど、地域に負荷もかかっている。それで利益を得ているが、地域に利益が落ちていないという考え方もしている。地域との関係を密にしていこうと考えている。」（談）

職住近接

一昔前は家族だけでなく従業員も店の近くに住んでいた。店の中に住んでいた場合や、別に寮があった場合もある。最近はほとんど通いで事業主も通いのこともある。「生まれた時からお店の裏側に住んでいた。基本的な商売の形だった。…（中略）従業員はみんな男女問わず住み込み。最大30人くらい住んでいた。店の裏の家で、早い時期には店の畳のところで寝起きもしていたが、裏に作るようになった。通いになったのは高度経済成長の時。」（談）

〈文〉大鶴啓介（東京大学空間デザイン研究室修士課程一年）／渋谷政秀（東京大学都市デザイン研究室修士課程一年）／羽野明帆（東京大学都市デザイン研究室修士課程一年）

働くまちへ

前ページでは、神田に特徴的な老舗企業の集積とその変遷に関して述べた。多くの丁稚さんが神田の老舗企業で働き、そして神田の町に住んでいた。一年に一度の神田祭は町人達によって大いに盛り上がった。神田は暮らすまちであり、そして働くまちだったのである。

■人口データから見る神田

古くから職住近接のまちとして栄えてきた神田は、都市化の流れを受けて働くだけのまちへと変化していった。神田は東京駅近接のオフィス街・大学街となっていったのである。

図1は国勢調査より千代田区および神田（旧神田区の範囲）の昼間人口と昼夜間人口との比の推移をグラフで示したものである。千代田区全体において、1960年から1995年にかけて昼間人口はおよそ1．5倍増加している。

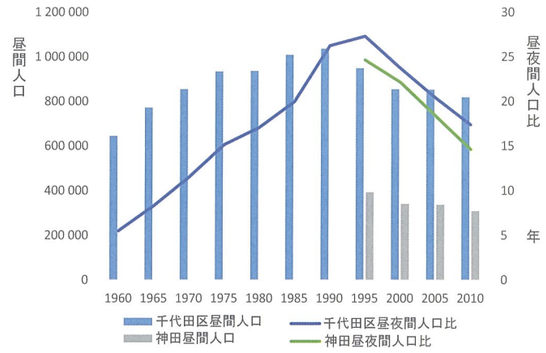


図1 昼間人口および昼夜間人口比

また、昼間人口の増加以上に夜間人口が減少し、昼夜間人口比はおよそ5倍の値になっている。1995年以降は昼間人口が減少し、また夜間人口が増加したために昼夜間人口比が大幅に減少している。このことから1995年までは千代田区で全般的に働くまちへの転換が生じ、近年では再び住むまちへの転換が起ころうとしていることがわかる。しかしながら、現在でも昼夜間人口比が高く、千代田区はいまでも働くまちであり、神田に絞っても同様の傾向が読み取れる。

■生活施設の減少

神田が働くまちへと変貌したことで、神田の町には多くの変化が起こった。

図2は、神田における浴場、理容・美容室、クリーニング施設の店舗数変遷を千代田区商工名鑑に記載されている事業所数をカウントすることにより表したものである。ただし、2014年の事業所数はタウンページのホームページよりカウントした。これらの施設は1951年から1960年にかけて多く神田に存在しているものの、現在ではその数は非常に少なくなり、特に浴場は1951年の28店に対して現在では3店のみと、10分の1ほどになってしまった。浴場や理容室・美容室、クリーニング店は生活に密着したサービス店であり、これらが神田の町からだんだんと姿を消していることから、神田の「住むまち」としての機能が失われていったことがわかる。

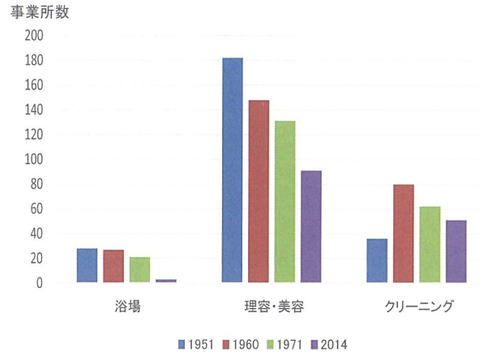


図2 事業所数-神田

住むまちとしての神田

神田が働くまちへと変化していくことと、神田におけるコミュニティやネットワークの変化とは決して無関係ではない。

■住居表示の変更

神田ではしばしば町名の表記や区分が変更されてきた。かつては関東大震災後の区画整理に伴う表記変更や、1947年の麹町区と神田区との合併・千代田区の発足に伴う表記変更等が行われた。また、近年では、住居表示に関する法律に基づき1964年から1980年にかけて実施された住居表示により、神田の町名や区分が大きく変更された。

図3では、住居表示実施による町丁目域の変化を示している。これによると、現在の東神田、西神田、外神田、内神田のあたりで多くの町丁表記や区分が廃止されていることがわかる。このように、神田を冠した町名が廃止されてしまったり、旧来の領域とは異なる町丁域に変更されてしまったり、神田に住む人々に馴染んでいた旧来の町丁の多くが、現在では異なるものとなってしまっている。

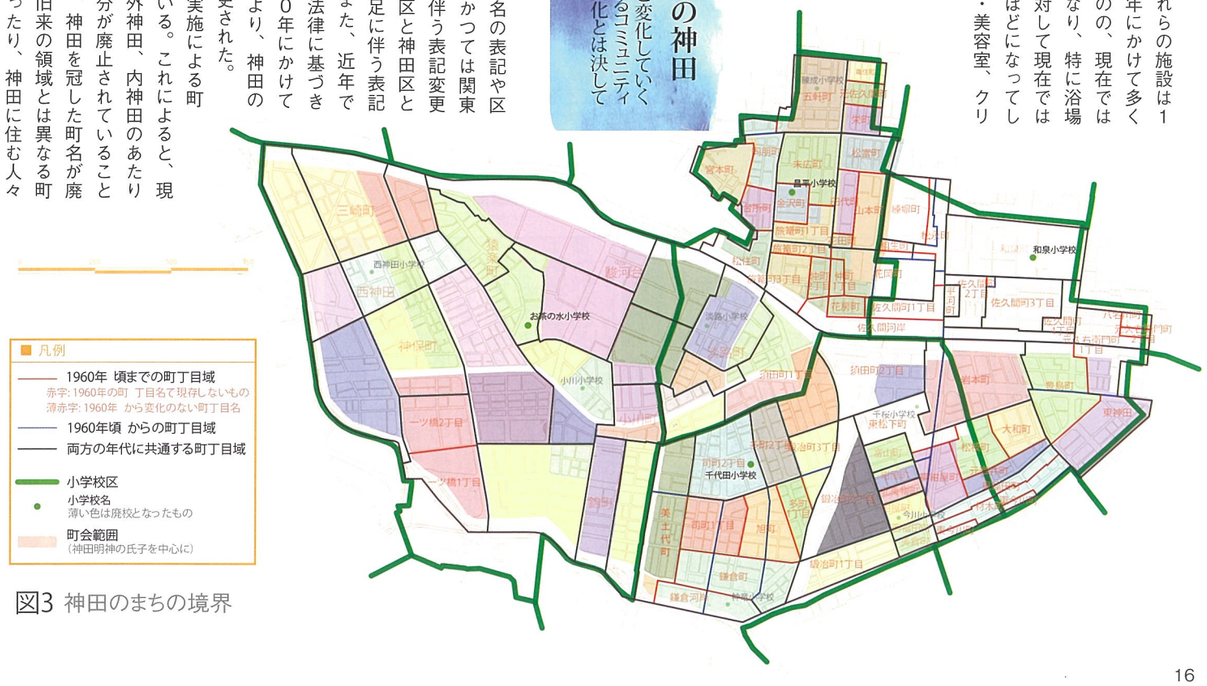


図3 神田のまちの境界

▲【東京の路地は今…一色町・下町・記憶の町】
著者：光　幸國
出版社：三一書房（2007/04）

▲神田で行われる納涼会の様子（須田北部町会）

■町会区分

図3では、住居表示や学区に関する情報以外に、現在の町会の範囲を示している。この町会範囲と住居表示実施以前の町丁区分を比較すると、現在でも住居表示実施以前の町丁区分に基づくコミュニティが存続していることが分かる。これらの町会はもともと神社の氏子の範囲を基本としているため、神田祭では基本的にこの町会区分を中心に神田に住む人々が集まり、そして祭りを楽しむのである。

このように、神田に住む人々のネットワークは変化の中にあるものの、神田の町会は昔の町会区分を基本としていまもなお機能しており、逆境にありながらも、昔から続く神田に住む人々の地縁のようなものが維持されている。

再び暮らすまちへ

神田は路地のまちだ。車の来ないヒューマンスケールの空間は常に神田に住む人々に解放されている。自由度の高い空間が都市内に残されていることにより、路地を生活空間として利用しあう流れがうまれる。たとえば植木鉢を置いたり、道にチョークで書いてゲームをしてみたり。またハレの日においても路地は重要な意味を持つ。例えば納涼会で道路を封鎖して宴会を開くことは、道路が重なり合う空間に路地のアクティビティを染み出させ、ポケットパーク的に用いている動きといえる。

■路地の分布

図4は、平成22年度ゼンリン住宅地図から4m以下の道を路地として抽出したものを、神田の地図上に示したものである。なお、4m以下かどうかの判断が困難な道は、Google map上で可能な限り確認した。オフィス街としての神田、大学街としての神田と変わってしまったものの、神田にはまだ住む人のための路地が多く残されていることがわかる。

もう少し細かく路地を見てみると、駿河台辺りは大学などの土地利用が多いためか、路地は少ない。また、錦町三丁目町会と一神町会がぽっかり路地が少ない地域なっている。現存しているこれらの路地は大きな道路に分断されてしまう可能性や、路地をまたいで建てられた建物によって消滅してしまう可能性がある。

■木造建築の分布

また、神田には多くの木造建築が現存している。図4で赤く示されている建物は木造建築である。この図から、多くの木造建築は現存する路地に存在することが分かる。古い木造の建築物が路地沿いに立ち、路地と共にそのまま残っている様子が伺える。このことから、路地には住むまちであり、働くまちであった神田の雰囲気が残されている可能性が高い。

■これからの都心居住

神田らしさの一つに「神田は、住むまちであり、働くまちであることがある」とするならば、今後の都心居住を再考することが、神田らしさを引き立てるひとつの鍵になると考えられる。神田らしさには、都市化の流れの中でも魅力ある都市空間を維持することのできる力がある。働くまちとして変化していった神田においても、氏子や町会の区分を基本とした人々の強いネットワークがある。また、路地が広範囲にわたり分布している。路地は住む人のための空間としてかつて機能しており、そしてその機能は未だ残っている。これら人々のネットワークの強さや、数多くの路地、そしてかつて職住近接のまちだったという神田の歴史が、今後の神田における都心居住を支える可能性がある。今後はさらに路地をいかした都心居住の可能性を探っていきたい。

図4
木造建築と路地との関係性

〈文〉今川高嶺（東京大学都市デザイン研究室修士課程一年）／柄澤薫冬（東京大学地域デザイン研究室修士課程一年）